

種 別： 学院留学（長期）
所属・職・氏名： 総合政策学部・教授 安高 雄治
研究課題： マダガスカル南西部のタナラナ社会における人類生態学研究
留学期間： 2014年4月8日～2015年3月21日
留学先： マダガスカル共和国・南西部
ベザ・マハファリ特別保護区

I. 研究の背景と目的

マダガスカルは、生物多様性の高さや固有種の多さで注目されると同時に、これら希少生物の多くが地域住民の生計活動の結果として失われていることで知られる。例えば、動物は食料や現金収入を目的として、また植物は焼畑耕作や自家用建築材などのために伐採され、利用されている。このような活動の影響は、雨が少なくかつ不安定な南西部で著しい。

2003年9月、当時のラヴァルマナナ大統領は、外国からの投資を増やし経済成長を軌道に乗せるため、国内の保護区面積を大幅に拡張すると宣言し、5カ年計画（Madagascar Action Plan 2007-2012）を策定した。この計画の実効性には疑問に思われる点もあったが、計画自体は比較的順調に実行に移され、自然保護状況の改善が期待された。しかし、2009年3月に大統領が辞任に追い込まれ、国内情勢が混乱し治安も悪化する中で、木材の不正輸出などの問題も顕在化し、保護計画にも影響が見られるようになった。その後、新大統領が選出され、国内情勢は落ち着きを取り戻しつつあるが、南西部では治安状況にあまり改善が見られていないのが現状である。

有効な自然保護体制を構築するためには、単に保護区を拡張するだけでなく、その地域に暮らす人々の生活をも見据えた保護活動を行うことが不可欠である。同時に、現在のマダガスカルにおいては、国内情勢の混乱や治安の悪化などによる影響も考慮に入れる必要がある。そこで本研究（留学）では、（1）自然資源の利用を中心に人々の生業活動や食物摂取状況などについて通年で確認し経時的に分析すること、また（2）国内情勢の混乱や治安の悪化が彼等の生活に及ぼす影響とその対策について明らかにすること、を目的として現地調査を行った。

II. 対象と方法

マダガスカル南西部の沿岸地域では、降雨は11月下旬から3月中旬までの時期に限られており、年平均降水量は250～350mm程度である。雨季であってもまとまった量の降雨が観察されるのは月に数回程度であり、ひとたび干魃に見舞われると収穫期直後の最も食糧の豊富な時期であっても食糧不足が発生すると言われる。このような傾向は、比較的降水量の多い内陸部でも同様である。本研究では、沿岸地域の乾燥環境に暮らすタナラナと、内陸部で生活を営むマハファリの人々を調査対象とした。ともに、保護区の近くで主に農耕と牧畜を生業とする集団である。

現地調査は2014年4月から2015年3月にかけて実施した。対象村では、悉皆調査により各世帯・個人の基本的属性に関する情報を収集した後、保護区内外における自然資源利用や保護政策に対する考えなどに関して聞き取り調査を行った。また、代表的な世帯を抽出して、畑の位置や面積、耕作している作物などについて確認すると同時に、秤量及び聞き取り調査によって食物摂取状況を把握した。これらの調査を継続しつつ、治安悪化の影響やその対策などに関する情報を収集した。

Ⅲ. 研究成果

現地調査によって収集した情報・データの多くは、現在も入力作業・分析を行っている途中である。ここでは、主に生業活動の影響及び治安悪化への対処について現地で観察・聞き取りした中からその一部をまとめた。

① ウシ放牧地の畑への転化

タナラナの対象村には共有地としてのウシ放牧地があり、住民全員が利用可能な場所として長期にわたり維持されてきた。近年、人口増加によって土地不足が深刻化し、新たな土地の確保が困難になる中で、若者らはその放牧地の中に畑を開くことを考え始めていた。しかし、放牧地の重要性を説く長老らに反対され、実現には至っていなかった。

ところが、一人の若者が周囲の反対を押し切って放牧地内に畑を開いてからは、他の若者らも我先にとその後が続いた。結果として、ウシ放牧地の畑への転化は、特に長老らと村のこれからの担う若者との間に対立を生じさせることとなった。家畜は、食糧の豊富な時期には財として蓄え、食糧窮乏時に売却／物々交換することで食糧不足のリスクを緩和するバッファとしての役割を果たす。ウシ放牧地の畑への転化は、一時的な土地不足は解消するものの、この厳しい乾燥環境に暮らす人々の将来的な食物の入手、なかでも食糧窮乏時における食糧確保をさらに困難なものにすると考えられた。

② 焼畑耕作による森林の消滅

南西部には、町や村から遠く離れた場所に無人の土地があり、そこには手付かずの乾生有刺林が残されてきた。しかし、土地不足が深刻化する中で、これらの土地は「所有者のいない土地」として先着順に伐採され、焼畑へと変えられていった。乾燥した環境のため、耕作後の植生回復はなかなか進まず、中にはその後もウシへの給餌場所として定期的に火入れされるところもあり、急速に森林は消えていった。例えば、トゥリアラの東方には木本のほとんど見られない広大な土地が広がるが、その地も僅か 30 年ほど前までは乾生有刺林の一次林が広がっていたことが確認された。また、現在ではトゥリアラ北東の地において大規模な伐採が続いており、そこにはトゥリアラ南方の本調査対象集落からも出稼ぎに出ていた。安定的な食糧確保が困難な地に暮らす人々の生存戦略の一つと言えるが、それは森林の減少や消滅という代償の上に成立していた。

③ ウシを守るための自衛策：ディナベ (*Dinabe*)

2009 年のクーデター後、マダガスカル南西部（特に内陸部）ではウシ泥棒の活動が極めて活発になっており、人々の生活に大きな影響を及ぼしていた。家畜を失うことは、安定的な食糧確保のためのバッファとしての機能や、冠婚葬祭時に欠かせない贈物を失うことを意味する。治安悪化に対して、人々は、ウシを守るため牛車で長距離移動を集団で行うようになっていた。また、徒歩で移動する場合は、保身のために銃を携帯することが多くなった。つまり、治安悪化はフード・セキュリティ上の問題に留まらず、日々の行動にまで影響を与え、さらには多くのウシを失った家族の社会的地位をも揺るがしていた。

このような状況下、人々は当てにならない警察や軍人に見切りを付け、自衛のための組織であるディナベ (*Dinabe*) を作り、公的な認可を得て活動を始めていた。ディナベの活動は、住民の支持を背景に短期間で急拡大したが、一方で、その強圧的なやり方に対して批判が燦るなど、いくつかの問題も見られるようになっていた。

保護区内外における自然資源利用や保護政策に対する考え、食物摂取状況などに関しては、データ入力・分析を進め、逐次公表する予定である。尚、上記成果の一部は、2016年3月26日に開催予定のマダガスカル研究懇談会において発表することが決まっている。

最後に、一年間の調査期間を与えていただいた学院と学部、同僚の先生方に深甚なる謝意を表します。